京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一二－一五　知恩院境内（京都市指定名勝 知恩院方丈庭園）　財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

知恩院境内（京都市指定名勝 知恩院方丈庭園）

2013年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

知恩院境内（京都市指定名勝 知恩院方丈庭園）

2013年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、緊急防災施設耐震改修事業に伴う知恩院境内（京都市指定名勝 知恩院方丈庭園）の考古学的調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

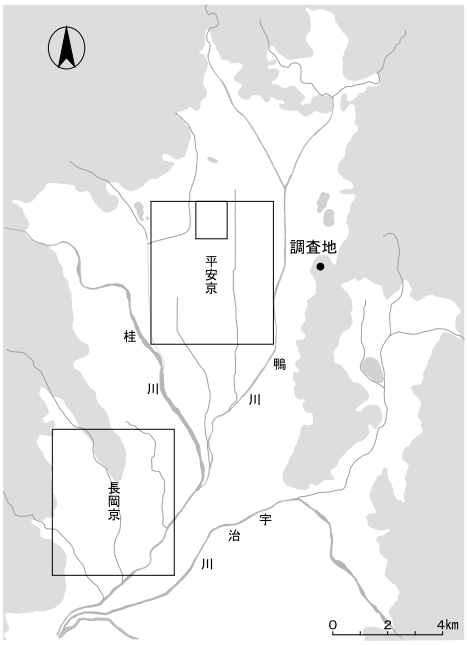
平成25年３月

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	知恩院境内（京都市指定名勝 知恩院方丈庭園）
2	調査所在地	京都市東山区新橋通大和大路東入三丁目林下町
3	委　託　者	宗教法人　知恩院　代表役員　伊藤唯眞
4	調 査 期 間	３次調査：2011年８月１日～2011年８月31日 ４次調査：2011年11月10日～2012年３月21日 ５次調査：2012年６月11日～2012年６月18日
5	調 査 面 積	発掘調査：約18.5㎡、立会調査：延長113㎡
6	調査担当者	３次調査：近藤章子、４次調査：モンペティ恭代、５次調査：柏田有香
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「岡崎」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	本 書 作 成	近藤章子・モンペティ恭代・柏田有香
12	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過　…… 1
（１）調査に至る経過　…… 1
（２）調査の経過　…… 3
２．調査地の位置と環境　…… 5
（１）立地と歴史的環境　…… 5
（２）周辺の調査　…… 5
３．３　調査の概要　…… 6
（１）３次調査　…… 6
（２）４次調査　…… 10
（３）５次調査　…… 12
４．知恩院方丈庭園における既往の調査　…… 16
（１）１次調査　…… 16
（２）２次調査　…… 22
５．ま と め　…… 27

図　版　目　次

図版１　遺構　１　北池（北から）
２　南池（北から）
図版２　遺構　１　３－Ａ区全景（北から）
２　３－Ｂ・Ｃ区全景（北から）
図版３　遺構　１　３次調査　立会箇所調査前風景（西から）
２　３次調査　石組（西から）
図版４　遺構　１　４－16地点（東から）
２　４－17地点（東から）
３　４－18地点（北から）
４　４－19地点（南西から）
図版５　遺構　１　５次調査前風景（北から）
２　５－Ａ区全景（南東から）
３　５－Ｂ区全景（西から）
４　５－Ｃ区全景（南から）

図版６　遺構　１　１次調査　１－１区洲浜（北西から）
　　２　１次調査　滝組（西から）
図版７　遺構　１　２次調査地全景（西から）
　　２　２次調査　２－１区景石（北西から）

挿　図　目　次

図１　調査地および周辺の調査位置図（１：2,500）　…… 1
図２　調査区配置図（１：500）　…… 2
図３　３次調査風景（北から）　…… 3
図４　４次調査風景（南から）　…… 4
図５　５次調査風景（北から）　…… 4
図６　石橋移動作業風景（北から）　…… 6
図７　３－Ａ区実測図（１：50）　…… 7
図８　３－Ｂ・Ｃ区平面図（１：80）　…… 8
図９　３－Ｂ・Ｃ区断面図（１：50）　…… 9
図10　４次調査土層断面模式図（１：20）　…… 11
図11　５次調査区平面図（１：80）　…… 13
図12　５次調査区断面図（１：50）　…… 14
図13　５－Ａ区出土瓦拓影・実測図（１：４）　…… 15
図14　１・２次調査区配置図（１：200）　…… 17
図15　１次調査区平面図（１：40）　…… 18
図16　１次調査区断面図（１：40）　…… 19
図17　１次調査洲浜出土軒丸瓦拓影・実測図（１：４）　…… 19
図18　１次調査洲浜出土銭貨拓影（１：２）　…… 19
図19　１次調査洲浜出土木簡実測図（１：２）　…… 20
図20　１次調査北池立面図・模式図　…… 21
図21　２次調査区実測図（１：40）　…… 23
図22　２次調査区断面図（１：100、１：40）　…… 24
図23　『都林泉名勝図会』巻之二　…… 27

表　目　次

表１　５次調査　遺物概要表　…… 15

知恩院境内（京都市指定名勝 知恩院方丈庭園）

１．調査経過

（１）調査に至る経過

調査地は、京都市東山区新橋通大和大路東入三丁目林下町400番地の浄土宗総本山知恩院境内の、知恩院方丈庭園内にあたる。庭園は平成２年に京都市指定名勝となった。この度、国宝知恩院三門ほか９棟並びに宋版一切経ほか11件の緊急防災施設耐震改修事業に伴い、配管工事および放水銃設置が計画された。名勝庭園内におけるこれらの現状変更に先立ち、工事掘削に伴い遺構の破壊が予想される箇所では、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護

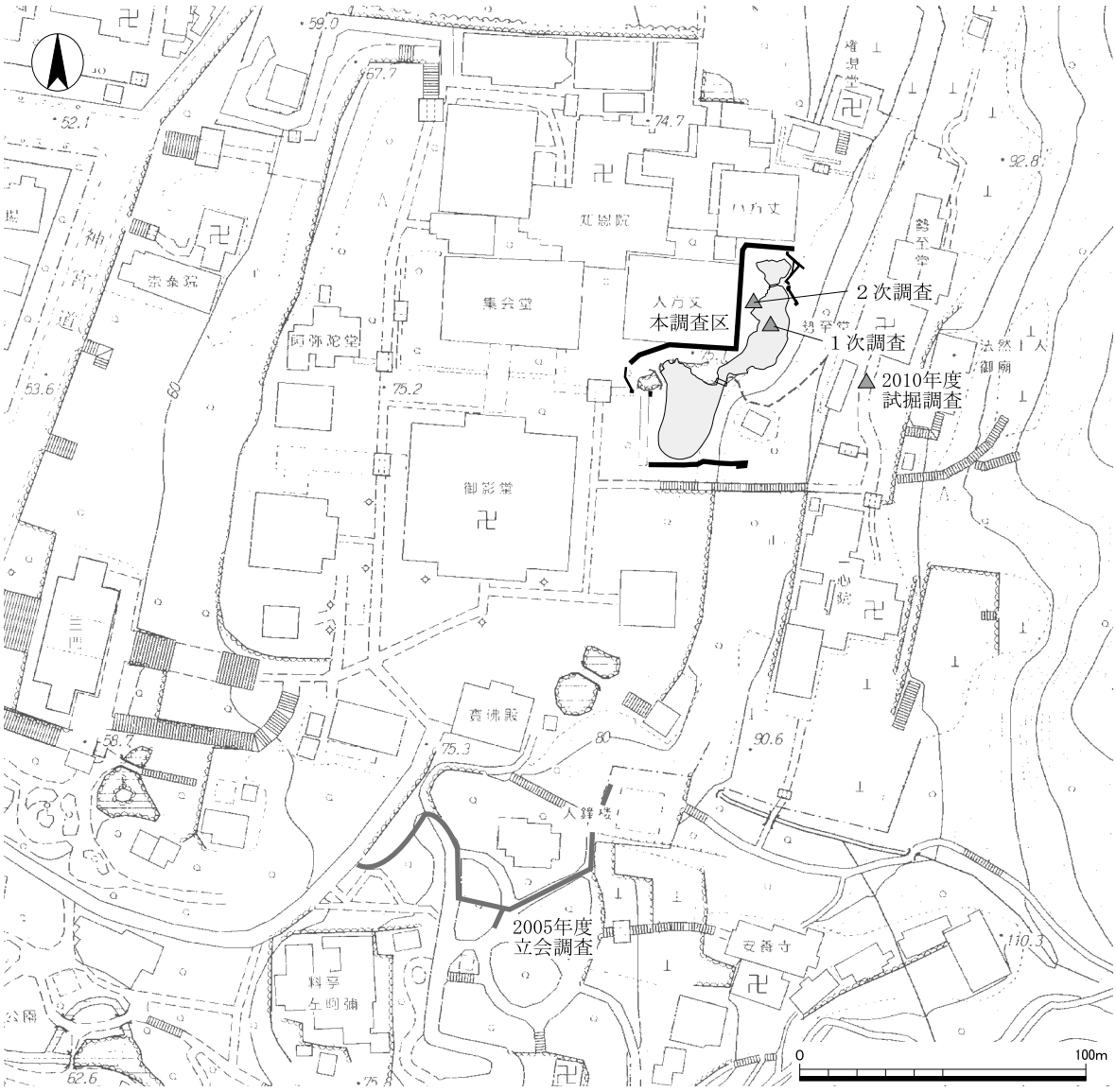


図１　調査地および周辺の調査位置図（１：2,500）

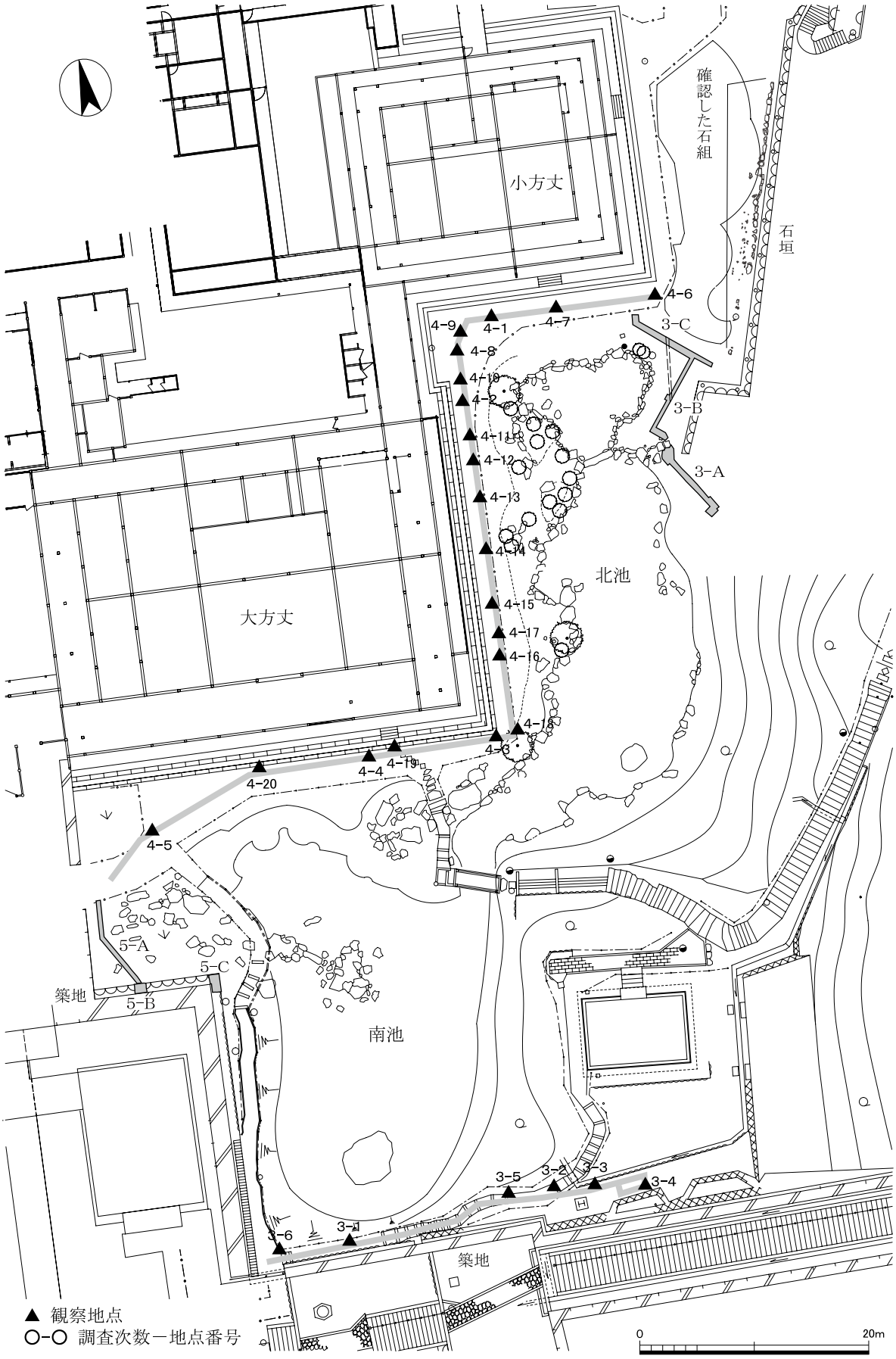


図２　調査区配置図（１：500）

課」という。）の指導により、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が考古学的調査を実施することとなった。また、旧埋設管などが設置されていた箇所では、遺構面がすでに破壊されていることが予想されたため、工事中に立会調査を実施した。

調査は2011年８月から2012年６月の間で、工事日程に合わせ断続的に３回実施した。方丈庭園内の調査は過去に２度（2005年・2006年）実施しており、今回の調査は３次・４次・５次調査となる。

（２）調査の経過

方丈庭園は、大方丈と小方丈の東側から南側にかけて拡がる園池で、北池を中心とした北庭と南池を中心とした南庭とに分かれている。調査範囲は、庭園の北東側の北池の東斜面から石垣沿い、小方丈の南側から大方丈の東側・南側の園路、南庭の西端、南池とは園路を挟んで独立した築山の部分、庭園南端の階段から南築地沿いである。

３次調査　北池の北東部分と庭園南端で行った。まず、配管ルートとなる水路にかかる石橋の実測作業から始めた。当初の計画では石橋桁の間を配管ルートとするため、石橋にかかる樹根の撤去にとりかかった。しかし、樹根が予想より深く、石橋を支える水路の石組にまで根が回っていたため石橋自体が不安定な状態であり、修理が必要となると考えられることからルートの見直しとなった。そのため、文化財保護課・設計・工事業者と協議の結果、ルートの変更に伴い、調査区の変更を行った。その結果、調査区は配管予定地に幅約0.4～0.6ｍ、総延長24ｍ、３箇所にコンクリート升を据えるため、幅約0.7ｍの方形の調査区を設定した。記録作業の便宜上、３－Ａ～Ｃ区とした。調査区は東斜面調査に伴い一部で遺構が確認されたため、ルートが変更された箇所は、立会調査を行った。

庭園南端の築地塀沿いのルートについては、すでに既存の埋設管があることや階段の造作が近年に行われたものであることから立会調査とし、６箇所で土層観察と断面実測、写真撮影などの記録作業を行った。

調査期間は2011年８月１日～８月31日である。

４次調査　小方丈南側から大方丈の東・南側の園路で、まず、配管予定ルート上で行われた５箇所（４－１～５地点）の試験掘りに立ち会った。この試験掘りでは、ほとんどの地点が旧埋設管の掘形内であることがわかった。ただし、大方丈の南東角付近（４－３地点）では地表下－0.45ｍで池の埋土とみられる層を確認した。

図３　３次調査風景（北から）

本調査は幅約0.8ｍ、深さ約0.85ｍで、総延長約83ｍにわたる配管用掘削ライン内の、15箇所において土層観察と断面実測、写真撮影などの記録作業を行った。その結果、小方丈南側（４－

図４　４次調査風景（南から）

図５　５次調査風景（北から）

６～９地点）では整地層、大方丈南東角付近（４－16～18地点）では池状堆積および花崗岩製切り石やピット、大方丈南側の４－19地点では池状堆積、４－20地点ではピットなどを検出した。その他の地点では既存埋設管や旧ハンドホールの埋土内の掘削にとどまった。

調査期間は2011年11月10日～2012年3月21日である。

５次調査　南庭の西端、南池とは園路を挟んで独立した築山の部分で調査を実施した。築山の中央には地上に方形の石製井戸枠が据えられた円形の石組井戸がある。調査区は配管予定箇所である井戸の西側に南北方向の５－Ａ区、築山の南を区切る築地塀の雨落ち溝中に５－Ｂ区、築地塀の東コーナー部の放水銃設置予定箇所に５－Ｃ区を設けた。

５－Ａ区では築山の盛土と落込み遺構を検出した。文化財保護課の指導により記録作成後、配管予定深度の地表下－0.4ｍまで全体を掘り下げ、断面図を作成して調査を終了した。５－Ｂ区では江戸時代の雨落溝と考えられる瓦敷きを検出した。瓦敷きの上面で配管可能であることから、検出状況で記録を作成し調査を終了した。５－Ｃ区では浅い落込みを検出し、記録を作成した。５－Ｃ区中央には複数の既存の埋設管が通り、放水銃の設置個所を北東に寄せる必要が生じたため、雨落溝の石組みを解体して調査を行ったが、現代に施工された石組みの裏込めを検出するにとどまった。石組み解体部分の崩落を防ぐため土嚢で保護し、調査を終了した。

調査期間は2012年６月11日～６月18日である。

２．調査地の位置と環境

（１）立地と歴史的環境

知恩院は鴨川の左岸、京都盆地の東端に位置し、東山三十六峰の第二十一峰、華頂山西側山麓の大部分を占める。華頂山には将軍塚古墳群があり、墳丘径40ｍの円墳（将軍塚）を含む14基の古墳が点在する。華頂山は「花鳥山」とも書かれ、知恩院の山号である。知恩院の寺域は20万㎡と広大で、北は青蓮院、南は円山公園、八坂神社に接し、西は白川までである。北接する青蓮院との間には東から西へ流れる谷筋（大谷）が、また南には長楽寺奥の谷筋（菊渓）がある。

知恩院は法然上人が草庵を結んだ地に、弟子源智が大谷寺を創建したのが始まりである。その後、永享三年（1431）、応仁元年（1467）、永正十四年（1517）と３度火災により焼失するが、その都度、朝廷や幕府の援助を受け再建されている。

元亀四年（1573）、織田信長は知恩院に本陣を構え、室町幕府足利義昭と戦い、勝利を収める。それにより信長からの寄進を受け、その後、豊臣秀吉からも石高の加増を受け、経済的基盤が固まった。

江戸時代になって徳川家康により、青蓮院の寺領の一部が知恩院の寺域に寄進され、上の段（大谷の禅坊などの旧知恩院の地域）・中の段（諸堂伽藍の地域）・下の段（塔頭の地域）の三段に分かれた大伽藍が発願された。慶長八年（1603）から十五年（1610）にかけて、中の段に御影堂・衆会堂・方丈・庫裏など、下の段には20余の塔頭が整備された。元和五年（1619）には徳川秀忠によって、三門と経蔵が建立された。しかし、寛永十年（1633）には中の段が火災にあい、大方丈・小方丈・庫裏・衆会堂・御影堂・廊下が炎上した。現在の伽藍は寛永十年（1633）の焼失後に家光により再建されたものである。

庭園の作庭は小堀遠州とかかわりがあった僧玉淵と量阿弥によるもので、寺の再建時、寛永十九年（1642）から正保二年（1645）にかけて、整備されたと想定されている。池水は湧水を利用していることから、以前からあった池を改修して庭園が造られたものとも考えられている。

（２）周辺の調査

知恩院境内では、2005年に水道工事に伴う立会調査が南接する名勝円山公園から境内地の大鐘楼付近にかけて行われ、鎌倉から室町時代・江戸時代の包含層を検出している。2011年には文化財保護課が境内の上段に位置する勢至堂付近で２箇所の試掘調査を実施し、中世の包含層を検出している。また、本事業の一環として、境内で名勝庭園以外の遺跡範囲の調査を詳細分布調査として2011年から2012年にかけて実施した。この調査は知恩院境内の上段から中段にかけて網羅しており、御影堂と阿弥陀堂の間と南側で、石組・礎石・落込などを検出している。

名勝知恩院方丈庭園の調査としては、庭園の整備・保存管理計画に伴い、2005年・2006年の２箇年に行っている。名勝庭園内の調査はこれら２件であるため、別章で詳細を記述する。

３．調査の概要

（１）３次調査

調査区は、庭園東側の斜面から池の北部東側に３箇所設定した。便宜上、斜面上部から石橋までを３－Ａ区、石橋際から石垣沿いを３－Ｂ区、「二十五菩薩の庭」南側を３－Ｃ区とした。

庭園南側の築地塀に沿って行った配管工事に伴う立会調査は、６箇所で断面観察を行い、実測図、写真などの記録作業を行った。

遺構

３－Ａ区（図７、図版２） 斜面頂上と石橋手前の２箇所はコンクリート升をいれるため、約0.7ｍ四方の方形に掘り、深さは0.5ｍとした。他は幅0.4ｍ、深さ0.3ｍの調査区を設定した。

基本層序は腐葉土・樹根などの腐植土である2.5Y3/2黒褐色～3/3暗オリーブ褐色砂質土層、10YR6/4にぶい黄褐色～4/4褐色粘質土層、10YR4/6褐色砂質土層の地山である。斜面の高低差は約３ｍで、裾部ほど腐植土が厚く堆積する。

調査区内で上面が平坦な面をもつ石を２石（石１・石２）検出した。いずれも調査区外へと続くため、全容は把握していないが、一辺約0.3ｍの花崗岩である。何らかの遺構の可能性があるため、現状保存することとした。また下段付近で現存する石垣との関連が考えられる石を２石（石３・石４）検出した。これも同じく現状保存することとした。

石橋　花崗岩とチャートの２石からなる石橋で、池へと続く水路に架かる。２石の間には樹根が数本入り込み、約0.2～0.3ｍ開いている。この樹根を除去してできた隙間に配管する予定であったため、調査に先立ち石橋とその周辺の実測作業を行った。

３－Ｂ区（図８・９、図版２） 石橋手前に0.6ｍ×0.6ｍの方形の調査区を設定した。ここで石橋の台石を検出した。台石の規模は奥行き約0.8ｍ、幅0.7ｍ、厚さは0.2ｍ以上である。そのためこの石を避けて北側に調査区を移し、北東方向に幅0.3ｍで長さ７ｍの調査区を設定した。

基本層序は表土、10YR4/4褐色砂質土・2.5Y5/6黄褐色粘質土層、10YR6/6～6/8明黄褐色粘質土・10YR7/4にぶい黄褐色粘土層、2.5Y6/6明黄褐色～5/6黄褐色粘土層の地山である。調査区の中央付近から北に溝の石組の裏込め部分と思われるものを検出した。方形に加工した花崗岩を３石、その周辺に径0.15～0.2ｍ前後の石が確認できる。

図６　石橋移動作業風景（北から）

３－Ｃ区（図８・９、図版２） 園路から石垣方向へ幅0.6ｍ、長さ８ｍの調査区を設定した。

基本層序は表土以下、2.5Y6/4にぶい黄褐色～5/4黄褐色、10YR5/6黄褐色～2.5Y6/6明黄褐色の砂質土と粘質土層の互層による整地層、10YR

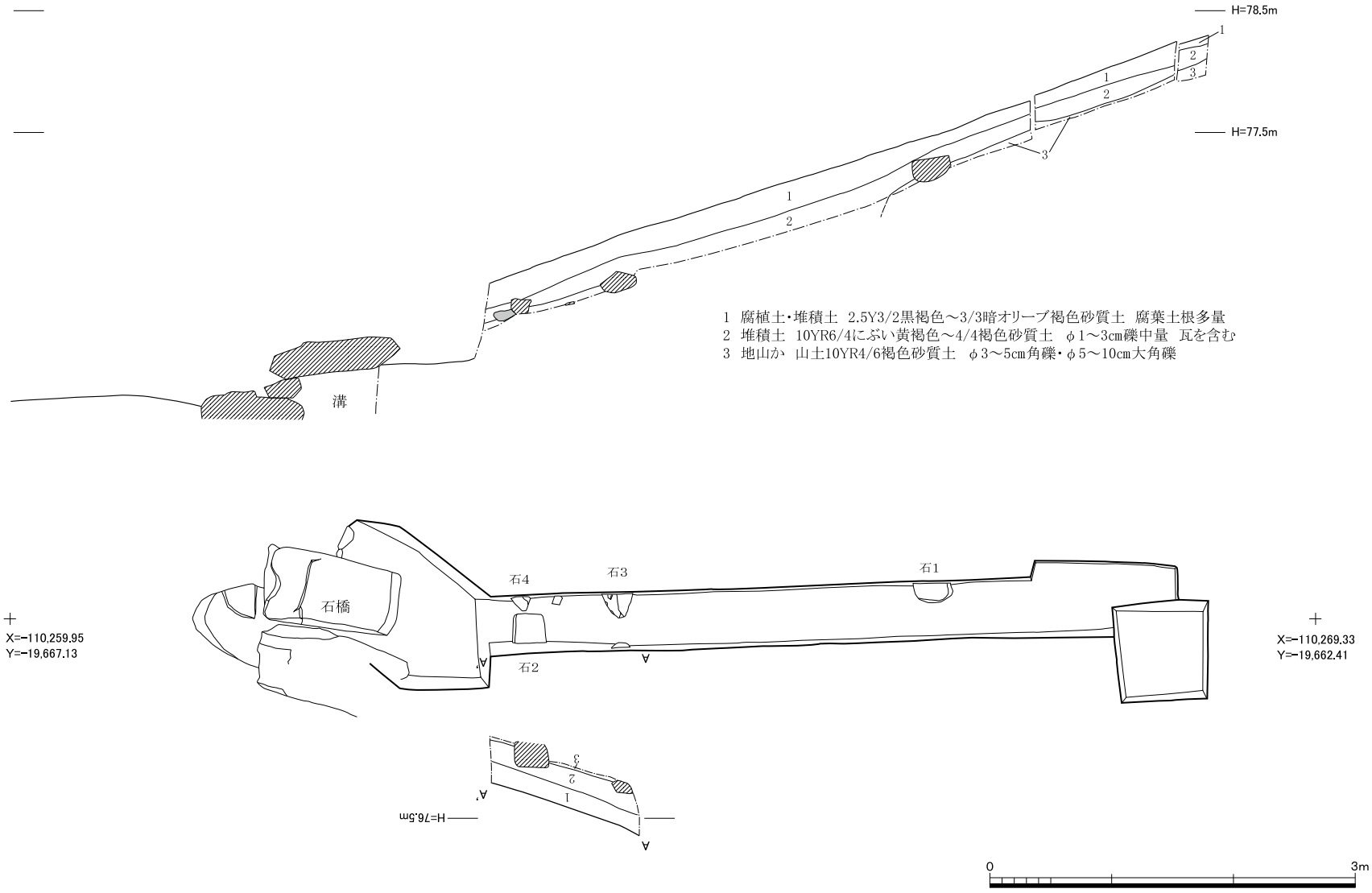


図7 3－A区実測図（1：50）

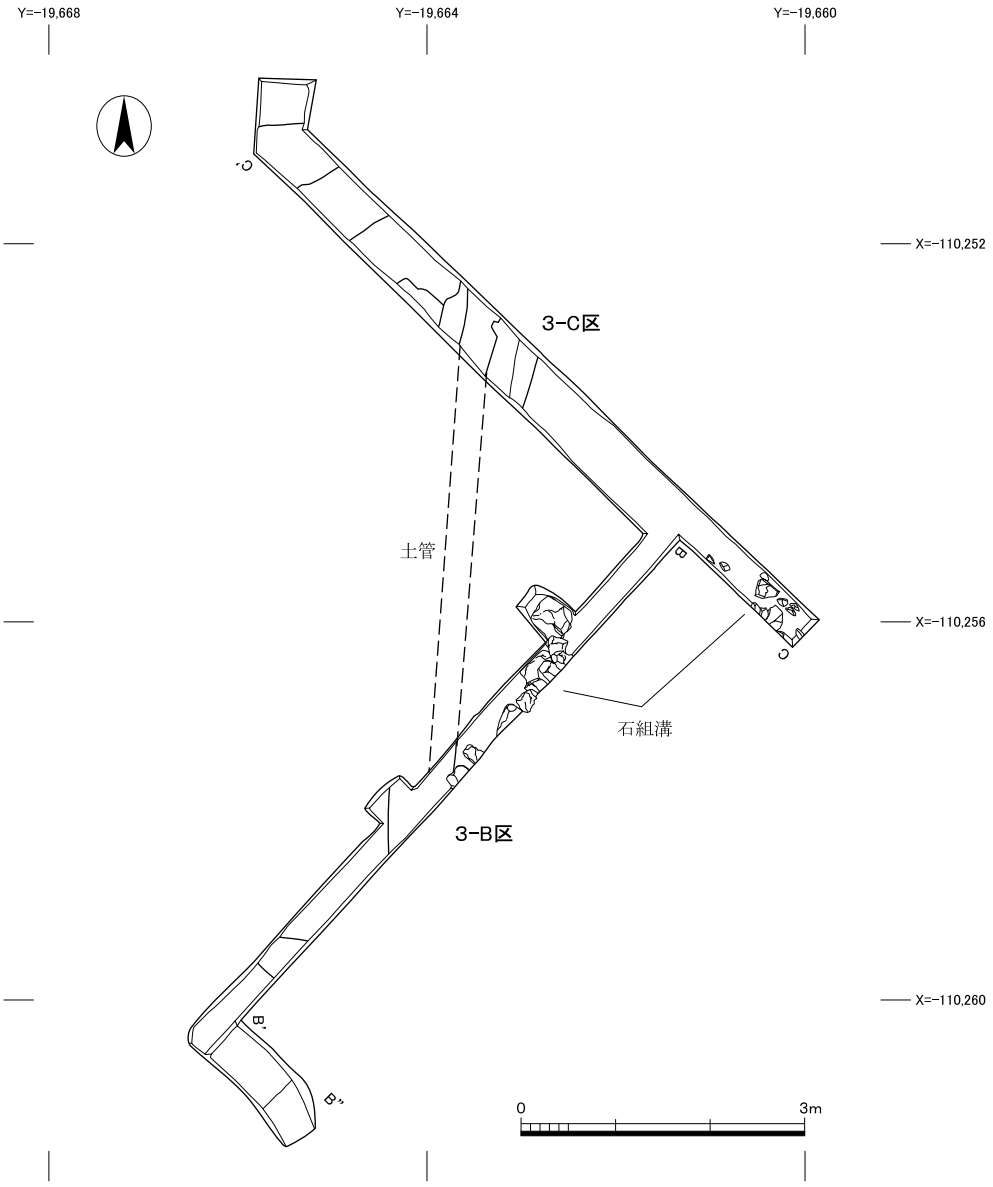


図８　３－Ｂ・Ｃ区平面図（１：80）

6/6～6/8明黄褐色粘質土・10YR7/4にぶい黄橙色粘土層の地山である。園路側は硬く締った整地が施されている。石垣側では３－Ｂ区で検出した石組溝に繋がる石を数個検出した。

３－Ｂ・Ｃ区で検出した石組溝を現状保存するため、配管ルートの変更を行った。新たなルートは３－Ｃ区から３－Ｂ区へと続く廃棄された土管の掘形であるため、すでに攪乱されている箇所である。

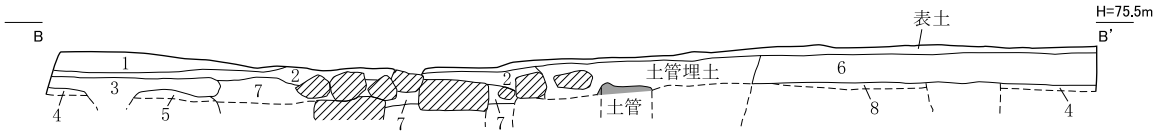
立会調査（図版３） 庭園南端の築地塀に沿う石段下に配管するための掘削工事に伴って、立会調査を実施した。工事に先立ち、石段の石材移動については、造園業者に依頼した。石材の移動時に掘削が伴うこともあり、その工事についても立ち会ったが、いずれも表土のみの掘削であった。

No.３－１地点　地表下－0.1～0.18ｍで旧水道管と埋設管を確認した。

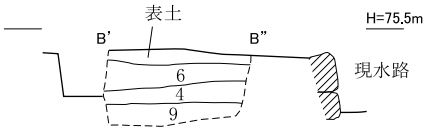
No.３－２地点　地表下－0.35ｍで旧水道管を確認した。

No.３－３地点　現水路南側の地表下－0.15ｍで花崗岩２石を検出したが、－0.5ｍで旧水道管を

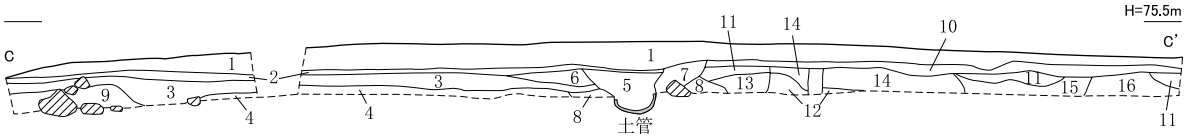
3-B区



1　白砂の互層 φ0.2～0.3cm
2　10YR4/3にぶい黄褐色・10YR4/6褐色砂質土 φ1～3cm角礫
　1層との間7.5YR4/4褐色砂質土硬化面
3　10YR3/2黒褐色粘質土・10YR4/1褐灰色砂質土 φ0.5～1cm角礫やや多い
4　10YR6/6～6/8明黄褐色・10YR7/4にぶい黄褐色粘質土 φ5～20cm角礫
5　7.5Y5/1灰色～5/2灰オリーブ色粘質土
6　10YR4/4～4/6褐色砂質土・2.5Y5/6黄褐色粘質土 φ5～8cm礫中量　締まりなし
7　5Y4/1灰色・5Y4/2灰オリーブ色粘質土 φ5～10cm角礫
8　4の層に5B4/1暗青灰色・7.5Y6/3オリーブ黄色粘質土　砂粒混じり
9　2.5Y6/6明黄褐色～5/6黄褐色粘質土 φ3～5cm中量(この面で湧水)



3-C区



1　白砂の互層 φ0.2～0.3cm
2　10YR4/3にぶい黄褐色・10YR4/6褐色砂質土 φ1～3cm角礫　1層との間7.5YR4/4褐色砂質土硬化面
3　10YR3/2黒褐色粘質土・10YR4/1褐灰色砂質土 φ0.5～1cm角礫やや多い
4　10YR6/6～6/8明黄褐色・10YR7/4にぶい黄褐色粘質土 φ5～20cm角礫
5　10YR4/2灰黄褐色～4/3にぶい黄褐色粘質土(土管崩落後の埋め土、土管の破片あり)
6　10YR4/1褐灰色～4/2にぶい黄褐色粘質土
7　10YR5/6黄褐色～4/6褐色粘質土 φ1～3cm礫中量、φ10cm角礫
8　2.5Y5/3黄褐色砂質土・2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
9　7.5Y5/1灰色～5/2灰オリーブ色粘質土
10　2.5Y6/4にぶい黄褐色・5/4黄褐色砂質土　三和土面
11　2.5Y5/4黄褐色～4/4オリーブ褐色砂質土　三和土面の補修土
12　10YR5/8黄褐色～7/8黄橙色粘質土 φ0.5cm礫少量
13　2.5Y5/3・5/6黄褐色粘質土φ1～3cm礫中量　8層に類似
14　2.5Y6/3にぶい黄色砂質土・2.5Y5/6黄褐色粘質土 φ1～2cm礫多量
15　10YR5/6黄褐色砂質土・2.5Y6/6明黄褐色粘質土　固く締まる φ1～2cm礫多量
16　10YR4/6褐色・10YR6/4にぶい黄橙色砂質土　固く締まる φ0.5～1cm礫多量

図９　３－Ｂ・Ｃ区断面図（１：50）

確認した。この石は旧水路の石組の可能性も考えられたが、埋設の際に影響を受けた可能性もある。－0.75ｍ以下、明黄褐色粘質土（2.5Y6/6）・黄褐色砂質土（2.5Y5/6）層となる。

No.３－４地点　地表下－0.4ｍで近世以降の瓦を含む整地層。－0.7ｍ以下、明黄褐色粘質土（2.5Y6/6）・黄褐色砂質土（2.5Y5/6）層となる。

No.３－５地点　地表下－0.2ｍで近世以降の瓦を含む整地層。－0.45ｍで焼土を含む褐色砂質土やや粘質土（7.5YR4/6）層となる。－0.65ｍで平坦な面をもつ厚さ0.05ｍ以上、幅0.13ｍの石を検出するが、ごく一部を確認したにとどまるため、詳細は不明である。

No.３－６地点　地表下－0.2ｍで近世以降の瓦を含む整地層。－0.9ｍで明黄褐色粘質土（2.5Y6/6）・黄褐色砂質土（2.5Y5/6）層となる。

石組（図版３）「二十五菩薩の庭」と石垣の間で、約23ｍにわたって長径0.5～1ｍ大の石が石垣に沿って、露出している。本来は名勝指定範囲からはずれているが、３－Ｂ・Ｃ区で検出した石

組溝との関連から、記録作業を行った。

遺物

遺物は、表土および整地層から近世以降の瓦類が、整理コンテナに１箱分出土した。３－Ａ区は上段に勢至堂や築地塀があり、それらに使われていた瓦の可能性がある。

小結

知恩院は造成により上段・中段・下段と大きく三つの平坦面を造りだしている。今回調査を行った池の東斜面は上段から中段に至る段差である。ここで検出した地山となる山土は、造成時に削りだされた層を確認したものであろう。表面は落葉などの腐葉土が厚く堆積し、樹根などにより撹拌されているが、比較的安定した層である。ここから北の斜面は垂直に切りだされ、石垣で土留めされる。今回石組溝の一部を検出したが、溝はこの石垣に沿って配置されており、池の北端へ流れ込んでいると思われる。また、この石垣の石材には切り出しの際についた矢跡や陰刻などが散見され、江戸時代もしくはそれ以前に造られたものである。石垣の北部付近は湧水が著しく、排水としての機能だけではなく、池への導水溝の可能性も考えられる。

２次調査で確認した整地の状況を、３－Ｂ区や３－Ｃ区の一部でも確認できた。３－Ｃ区中央から東では整地層は「二十五菩薩の庭」作庭時に削平され、そこに盛土し、その際に土管を破壊している状況が確認できた。この庭は昭和に作庭されたものであることから、土管はさらに古い時期に配管されたものである。

このように方丈庭園は、知恩院造成時の削り出し面や擁壁、堅牢な整地、また近・現代の庭園改変などがみられる貴重な場所である。

（２）４次調査

調査は配管予定ルート上で行われた５箇所の試験掘りに№４－１～５、小方丈南側に№４－６～９、大方丈東側に№４－10～17、大方丈南側に№４－18～20の観察地点を設けて実施した。

以下に、地点ごとに調査結果を述べていく。主な調査地点の土層は図化し、後記した。

遺構

№４－１・２・５地点　旧埋設管や現埋設管により、全て攪乱を受ける。

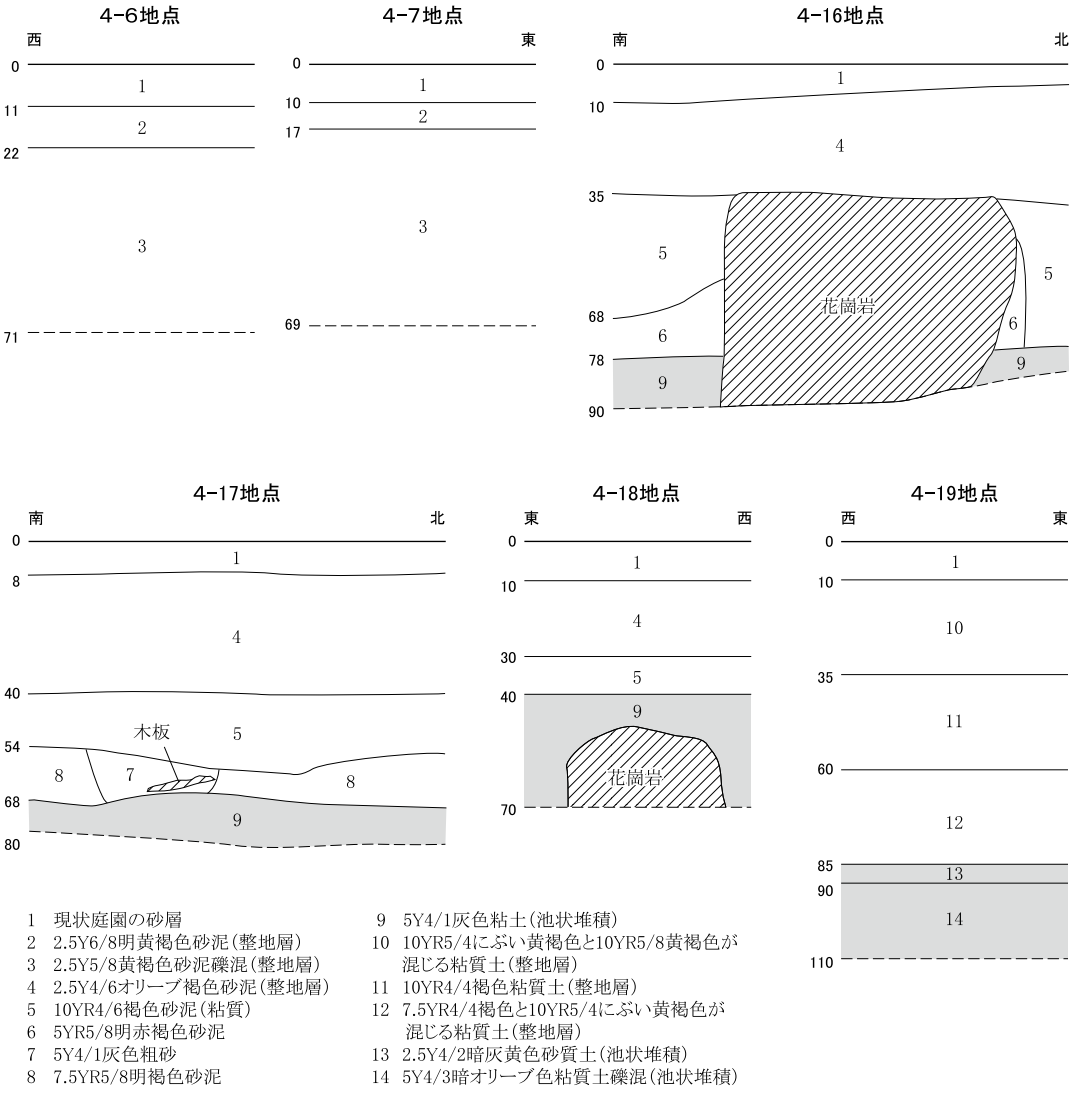
№４－３地点　大半は旧埋設管による攪乱であるが、一部、池の堆積と推測される土層を確認した。

№４－４地点　大半は旧埋設管による攪乱であるが、雨落ち溝側で炭の混入する層を検出した。

№４－６地点（図10）　地表下－0.11ｍまでが現状庭園の砂層、－0.22ｍまでがそれに伴うと考えられる整地層。以下、掘削深の－0.71ｍまで時期不明の礫の混ざった黄褐色砂泥の整地層を検出した。

№４－７地点（図10）　№６とほぼ同じ堆積状況が続いている。

№４－８地点　地表下－0.08ｍまでが現状庭園の砂層。以下、掘削深の－0.74ｍまで黄褐色砂泥に明黄褐色粘土と礫がブロック状に混じる整地層を検出した。



1　現状庭園の砂層
2　2.5Y6/8明黄褐色砂泥(整地層)
3　2.5Y5/8黄褐色砂泥礫混(整地層)
4　2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥(整地層)
5　10YR4/6褐色砂泥(粘質)
6　5YR5/8明赤褐色砂泥
7　5Y4/1灰色粗砂
8　7.5YR5/8明褐色砂泥
9　5Y4/1灰色粘土(池状堆積)
10　10YR5/4にぶい黄褐色と10YR5/8黄褐色が混じる粘質土(整地層)
11　10YR4/4褐色粘質土(整地層)
12　7.5YR4/4褐色と10YR5/4にぶい黄褐色が混じる粘質土(整地層)
13　2.5Y4/2暗灰黄色砂質土(池状堆積)
14　5Y4/3暗オリーブ色粘質土礫混(池状堆積)

図10　４次調査土層断面模式図（１：20）

No.４－９地点　上層で庭園の砂層４層を検出、下層は８地点と同じ層を検出した。

No.４－10～15地点　旧埋設管や現埋設管により全て攪乱を受ける。

No.４－16地点（図10、図版４）　地表下－0.06～0.1ｍまでが現状庭園の砂層。西側（方丈側）において、地表下－0.35ｍで、幅0.7ｍ、高さ0.6ｍ以上の花崗岩の切り石を検出した。切り石北側の奥行きは0.1ｍであるが、南側の奥行きは深く、確認できなかった。下部は灰色粘土の池状堆積層に埋もれており、下端は確認できなかった。なお、この石材は工事によっても移動されず、そのままの状況で埋め戻されている。

No.４－17地点（図10、図版４）　地表下－0.08ｍまでが現状庭園の砂層。－0.4ｍまでが整地層。－0.54ｍで明褐色砂泥層をベースとして幅0.4ｍ、深さ0.14ｍのピットを検出した。このピット埋土は径5㎜のきれいな灰色粗砂で、下部に幅0.18ｍ以上の木板が入る。それより下層は灰色粘土の池状堆積となる。

No.４－18地点（図10、図版４）　地表下－0.1ｍまでが現状庭園の砂層。南側(池側)において、地表下－0.5ｍで、方形に加工した花崗岩を検出した。幅0.4ｍ以上、厚さは0.25ｍ以上ある。下部

は－0.7ｍまで灰色粘土の池状堆積層に埋もれており、下端は確認できなかった。

№４－19地点（図10、図版４） 地表下－0.1ｍまでが現状庭園の砂層。－0.85ｍまでが３層に分けられる整地層。以下、掘削深－1.1ｍまで、暗灰黄色砂質土と暗オリーブ色軟質土の２層の池状堆積を検出した。

№４－20地点 地表下－0.08ｍまでが現状庭園の砂層。その下層に２層に分けられる整地層。－0.26ｍで幅0.22ｍ、深さ0.26ｍ以上の時期不明のピットを検出した。埋土には炭を確認したが、遺物は検出できなかった。－0.31ｍで、粘土を貼りその上に粗砂を敷いた整地面を検出した。粗砂はピットの東側のみ確認した。

小結

今回の調査は、北池の北部および北西部にあたる、小方丈南側から大方丈東側、さらに南側沿いで行われた配管用掘削工事に伴う立会調査である。

小方丈南側には、地表下約－0.1ｍまでが現状庭園の砂層で、その下層には約0.2ｍまでがそれに伴うと考えられる整地層があり、それ以下は掘削深まで黄褐色砂泥層からなる整地層であり、安定した状態であった。

大方丈東側には、南半部で、最下層部に粘質土の池状堆積が認められる。

大方丈南東角部周辺では、№16地点と№18地点において花崗岩の切り石を検出した。特に№16地点のものは幅0.7ｍ、高さ0.6ｍ以上の大きさがあった。また、№17地点では灰色粘土の池状堆積の上部で灰色粗砂を埋土とするピットから木板を検出した。あるいはこの遺構はピットではなく、溝が断面として現れたものとも考えられ、検出した木板も木樋の一部かもしれない。これらの切り石や木板の下層は灰色粘土や暗オリーブ色粘質土の池状堆積が認められた。

以上のことから、現在庭園にみる池の汀は、元来、大方丈南東角部周辺に広がっていた可能性が考えられ、№16・18地点で検出した石材は池の護岸石あるいは景石とも考えられる。それに対して小方丈南側の土層は安定しており、池の汀は北には延びないとみられる。このように今回の調査は池の造り替えを検討する上で貴重な成果が得られた。

（３）５次調査

遺構

５－Ａ区（図11・12、図版５） 厚さ0.01～0.1ｍの腐植土を除去すると築山の盛土となる。盛土上面では落込み１・２を検出した。落込み１は検出長約1.2ｍ、深さ約0.35ｍで底部は凹凸があり安定しない。埋土はにぶい黄褐色泥砂で締まりは悪く、近代の瓦片が多量に混じる。落込み２は検出長約1.0ｍ、深さ約0.3ｍで底部は凹凸がある。埋土は暗褐色砂泥で近代の瓦片が混じる。落込み１・２ともに植栽の根の攪乱を受け、全体の形状も不明であるが、景石の抜き取り跡である可能性がある。

５－Ａ区は文化財保護課の指導により、全体に配管予定深度の地表下－0.4ｍまで掘り下げを行った。すべて築山の盛土中と考えられる。盛土中には江戸時代前期から中期頃のものと考えられ

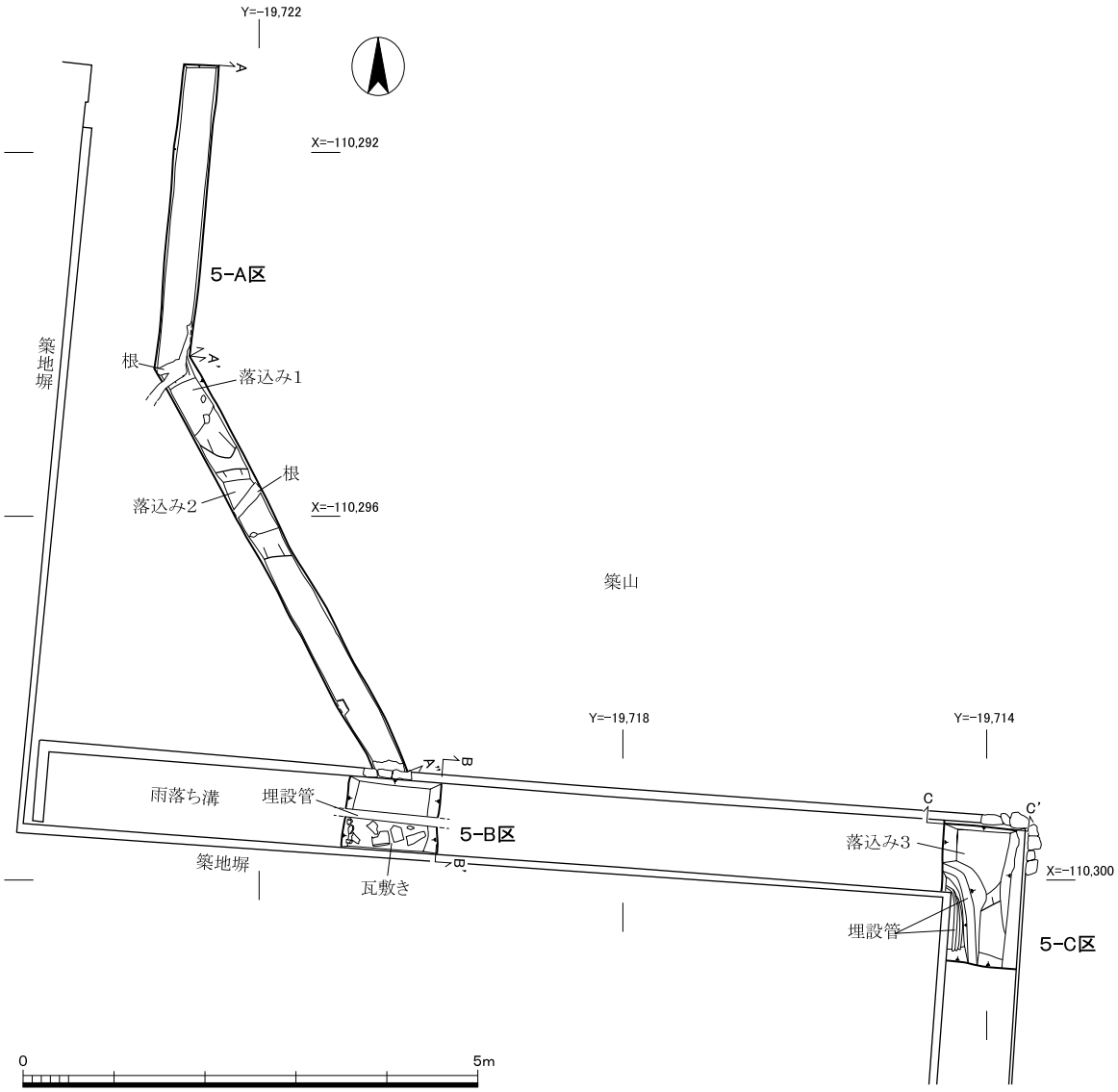


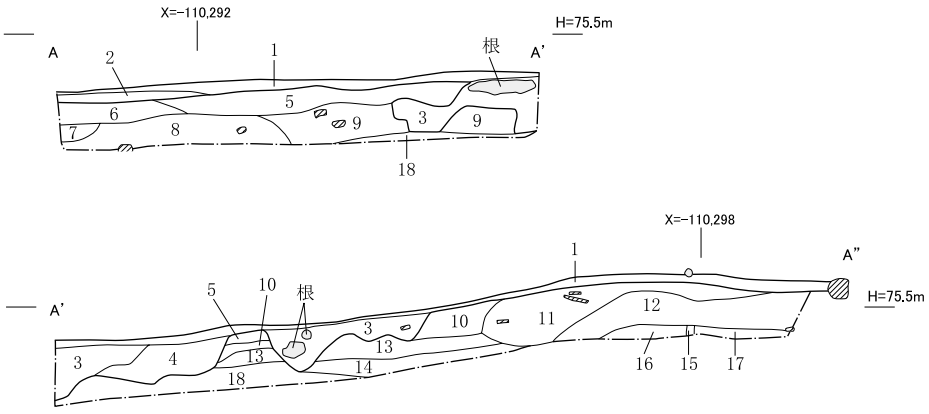
図11　５次調査区平面図（１：80）

る瓦片が混じる。ただし、トレンチ北半下層で検出した断面図18層の黄褐色砂泥層はやや粘質で固く締まり、遺物を含まないことから築山の盛り土以前の伽藍全域の整備に関わる整地土である可能性があるが、今回は部分的な検出に留まったため詳細は不明である。

５－Ｂ区（図11・12、図版５）　現状では厚さ約0.2ｍの砕石が敷かれている。その下に、黒褐色砂泥の腐植土が約0.1ｍ堆積する。この腐植土中には、築地塀の屋根から落ちたと考えられる近代の塀瓦や平瓦が多量に混じる。これを除去するとにぶい黄褐色砂泥層となる。上面は固く締まり、トレンチ南半では瓦が敷かれた状態で出土した。検出標高は75.25ｍである。江戸時代の雨落ち溝の瓦敷きと考えられるが、現地保存することになったため、詳細な時期は不明である。

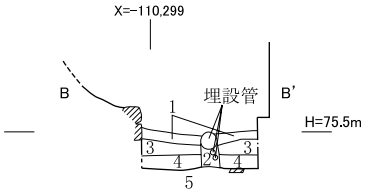
５－Ｃ区（図11・12、図版５）　５－Ｂ区と同じ雨落ち溝内のトレンチであるため基本的な堆積状況は５－Ｂ区と同様で、厚さ約0.2ｍの砕石の下に近代の瓦を多量に含む黒褐色砂泥の腐植土が堆積する。これを除去するとにぶい黄褐色砂泥層となる。瓦敷きは認められなかったが、白色粘土ブロックを混ぜて固くたたき締めており、雨落ち溝の整地土と考えられる。検出標高は５－Ｂ区と

5-A区



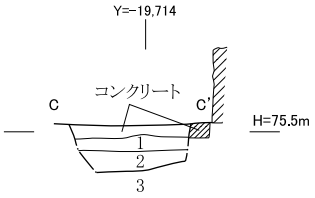
1　腐植土
2　10YR4/4褐色泥砂　砂質
3　10YR3/3暗褐色砂泥　10YR5/8黄褐色粘質シルトブロック少量混(根による攪乱受ける)
4　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂　φ1～5cmの礫少量混　瓦多量混　締まり悪い
5　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂　砂質　固く締まる(盛土)
6　7.5YR5/6明褐色砂泥　10YR5/2灰黄褐色泥砂が帯状に入る(盛土)
7　7.5YR5/8明褐色砂泥　やや粘質　固く締まる(盛土)
8　10YR4/6褐色泥砂　砂質　φ1～10cmの礫混　瓦混　締まり悪い(盛土)
9　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　φ1～5cmの礫少量混　瓦混　締まり悪い(盛土)
10　10YR4/6褐色砂泥(盛土)
11　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　φ1～5cmの礫少量混　瓦多量混(盛土)
12　10YR4/4褐色砂泥　φ1～3cmの礫少量混　やや粘質(盛土)
13　10YR4/2灰黄褐色泥砂(盛土)
14　10YR4/4褐色砂泥　やや粘質　φ1～5cmの礫少量混　締まり悪い(盛土)
15　2.5Y6/6明黄褐色砂泥　固く締まる(盛土)
16　5YR4/8赤褐色シルト　白色粘土ブロック混(盛土)
17　10YR4/4褐色泥砂　φ1～5cmの礫少量混　締まり悪い(盛土)
18　10YR5/6黄褐色砂泥　やや粘質　φ1～5cmの礫混　固く締まる(整地土か)

5-B区



1　砕石　φ1～5cm
2　埋設管掘形
3　砕石　φ1cm以下
4　10YR3/2黒褐色砂泥　締まり悪い
5　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　固く締まる
　瓦多量混(雨落ち溝整地土)

5-C区



1　砕石　φ1cm以下
2　10YR3/2黒褐色砂泥　締まり悪い
3　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　固く締まる
　白色粘土ブロック少量混(雨落ち溝整地土)

図12　５次調査区断面図（１：50）

同様の75.25ｍである。

遺物

遺物は、整理コンテナに４箱分出土した。瓦類が約９割を占め、残りが土器・陶磁器類と金属製品である。時期別には江戸時代前期から後期、近代のものがある。

５－Ａ区の落込み１からは平瓦の他、輪違瓦が１点（３）出土した。落込み２からは土師器皿、施釉陶器椀・擂鉢、瓦片などが出土した。時期はいずれも江戸時代後期から近代のものと考えられる。築山の盛土中からは、施釉陶器椀、焼締陶器甕、軒丸瓦（１）、丸瓦、平瓦、輪違瓦（２）な

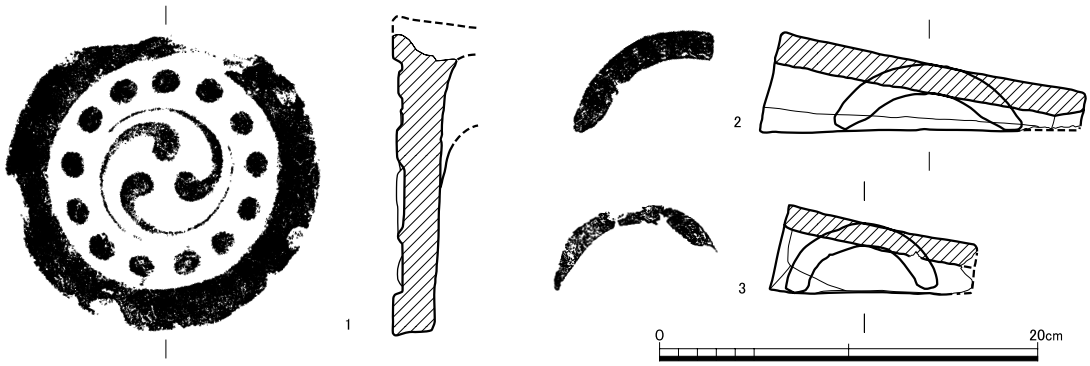


図13　５－Ａ区出土瓦拓影・実測図（１：４）

どが出土した。江戸時代前期から中期のものと考えられる。

５－Ｂ区の掘り下げ中には、土師質の塩壷、施釉陶器皿、軒丸瓦、塀瓦、平瓦のほか「京都　西彦」のスタンプが押捺された桟瓦が出土した。近代のものと考えられる。

５－Ｃ区の落込み３からは染付椀、施釉陶器片、丸瓦、平瓦、鉄釘が出土した。施釉陶器片は二次的に火を受ける。江戸時代後期から近世のものと考えられる。

小結

今回の調査では、限られた範囲ではあったが築山の盛土の状況や、江戸時代の築地塀の雨落ち溝の一部を確認することができた。方丈庭園は寛永十九年（1642）から正保二年（1645）の間に整備されたとされる。しかし、今回の調査では、築山の盛土から江戸時代前期から中期の瓦が多数出土しており、現状の築山は作庭当初まで遡らず、この築山部分は江戸時代中期以降のものと考えられる。ただし、寛政十一年（1799）に刊行された『都林泉名勝図会』の「知恩教院　方丈　林泉」の図にはこの築山が見え、築山の中には現在と同じ位置に井戸があり、井戸の周囲に多数の景石が据えられ、松などが植栽されている様子が描かれている。また、築山の南には瓦葺きの築地塀も認められる。このことから、少なくともこの時期以前には現在の築山の原型が存在したことは間違いないが、現状では景石の数や位置などが図会と異なり、その後も改変を加えられながら現在に至るものと推測される。

表１　５次調査　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
江戸時代以降	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、輪違瓦、塀瓦、鉄釘		軒丸瓦１点、輪違瓦２点		
合　計		５箱	３点（１箱）	４箱	０箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

４．知恩院方丈庭園における既往の調査

（１）１次調査

経過

知恩院方丈庭園整備工事に伴い、庭園の変遷および損傷状況を調査する目的で実施した確認調査である。

調査期間は2005年12月12日～28日である。

調査は池の中央部に土嚢を築き北池と南池を分断して、北池と南池に分けて実施した。まず北池から調査を開始し池底に１－１区を設定した。中央部の西側池底には洲浜状の遺構が認められ、また、東側へ高まりがのびるためトレンチの範囲を広げた。東岸では護岸石が少ないため、汀の形状を見る目的で１－２～５区を、護岸に用いられた巨石の据え方を探るため１－６区を設定した。

北池の東岸部には崖面から流れ落ちた土や植栽で隠れている景石を多数検出したため、景石周囲の土を取り除き一部植栽の枝打ちを行い景石を露出させた。その結果、滝組およびその南側石橋の間に、大きな景石を用いた石組があることがわかった。

当池の浚渫工事が十数年前に行われ、池内の堆積土は取り除かれていた。池の汀と池底に調査区を設定したが、堆積土は少なく一部チャートの岩盤が露出している箇所も見られる。

１－１区の基本的な層序は、近現代の遺物を含む砂礫層５～10㎝、その直下に黄褐色や灰色のシルト層、その下が地山となるチャートの岩盤である。シルト層上面では拳大の山石が分布し、江戸時代前期から中期の土師器皿や木簡が出土した。１－２～６区は、いずれも近現代の遺物を含む粗砂層が20～30㎝で、木の葉や枝が多く混入している。１－２～３区の汀肩部では砂層の下が灰色のシルト層である。

遺構

１－１区（図版６） 北池の中央部に設定した。池の水を抜いた時点で１－１区付近は高く盛り上がっており、西側護岸から中央部まで浚渫時と思われる砕石が敷かれていた。またこの部分にはチャートを主体とする角ばった山石が点々と分布していることが認められた。そのため他の池底より高い箇所にトレンチを設定し、大き目の石を原位置に残したまま砕石層を除去した。その結果、1.5～2.0ｍの幅で10～20㎝ほどの石が汀に沿って分布していることが判明した。石敷きはシルト層に張り付いたように検出され、洲浜遺構と判断される。また、この洲浜遺構は対岸の石灯籠へ向かって伸びている。１－１区の東側では最近埋められた浄化装置の埋設管によって攪乱されている。

１－２区 石灯籠南側の幅0.6ｍ、長さ3.8ｍの東西トレンチ。東護岸から1.2ｍの箇所に杭を打ち竹でシガラミを設けている。また、護岸から西へ1.4ｍの地点から西へ急激に落ち込む。湧水が激しいため底部まで掘り下げることができなかったが、南北方向の溝状遺構と思われる。探査棒で確認したところ、幅1.8ｍ、深さ1.0ｍを測る。

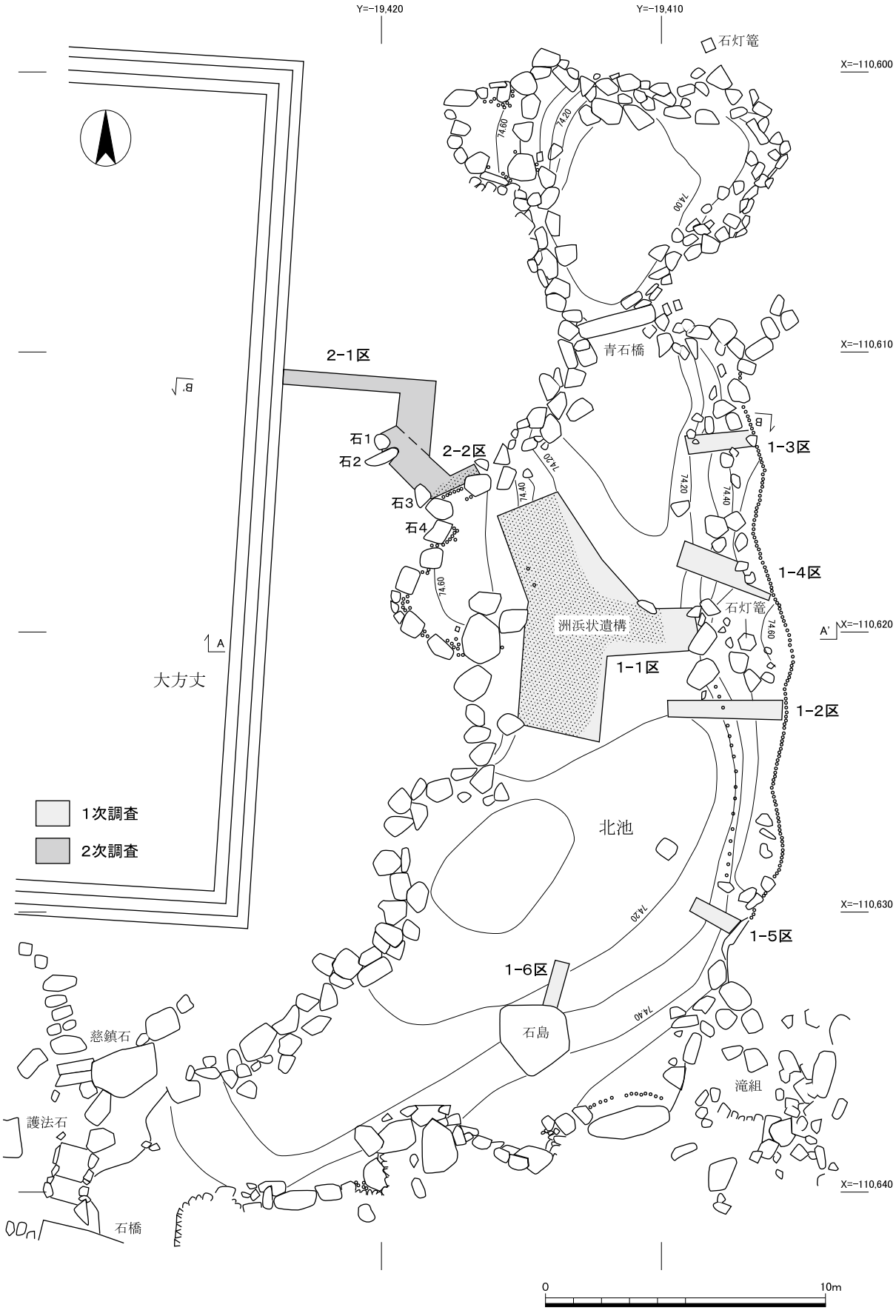


図14　1・2次調査区配置図（1：200）

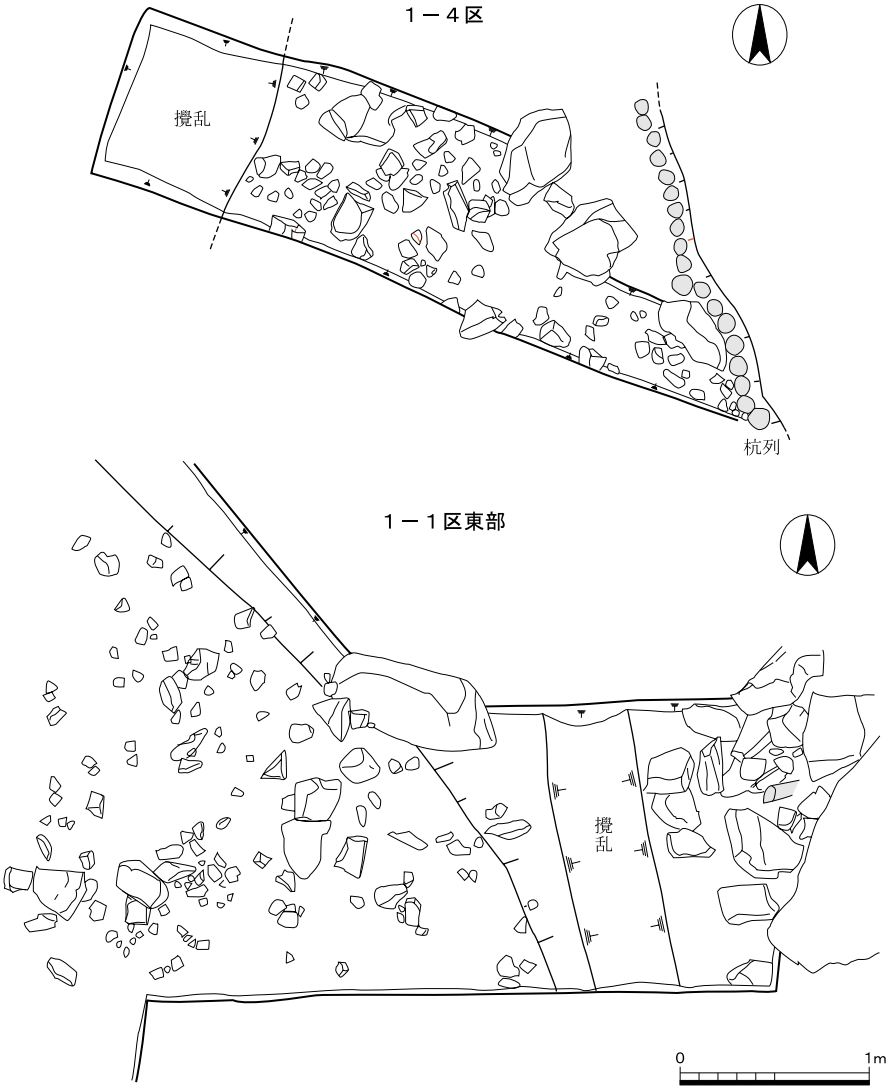


図15　１次調査区平面図（１：40）

１－３区　東汀の最も北に設けた幅0.6ｍ、長さ2.4ｍのトレンチ。１－２区のようなシガラミを設けず、素掘りのままの汀である。底部を地山層まで断ち割っていないが、肩部は黄褐色のシルト層で、地山の岩盤層に貼り付けたシルト層の可能性もある。池底は西へ向かって落ち込む。

１－４区　石灯籠の北側のトレンチで幅0.9ｍ、長さ3.5ｍのトレンチである。１－１区東側と同じように汀肩部に10～50㎝の石が敷き詰められている。１－１区とあわせてみると石灯籠をとりまくように景石が配され、洲浜遺構と同程度の大きさの石が密に撒かれている。西端は浄化装置の埋設管で攪乱されている。

１－５区　滝石組北側の岩盤が露出している箇所のトレンチ。岩盤が西へ向かって落ち込み、深さ10㎝で黄褐色シルトの混入した黄灰色砂層がみられる。その上に木の葉や枝の混入した粗砂層が堆積している。

１－６区　滝組の南西に据えられたチャートの巨石に接して設定した。深さ15㎝でチャートの岩盤を検出した。岩盤は平坦でこの景石は岩盤の直上に据えられていることを確認した。根石などもみられない。

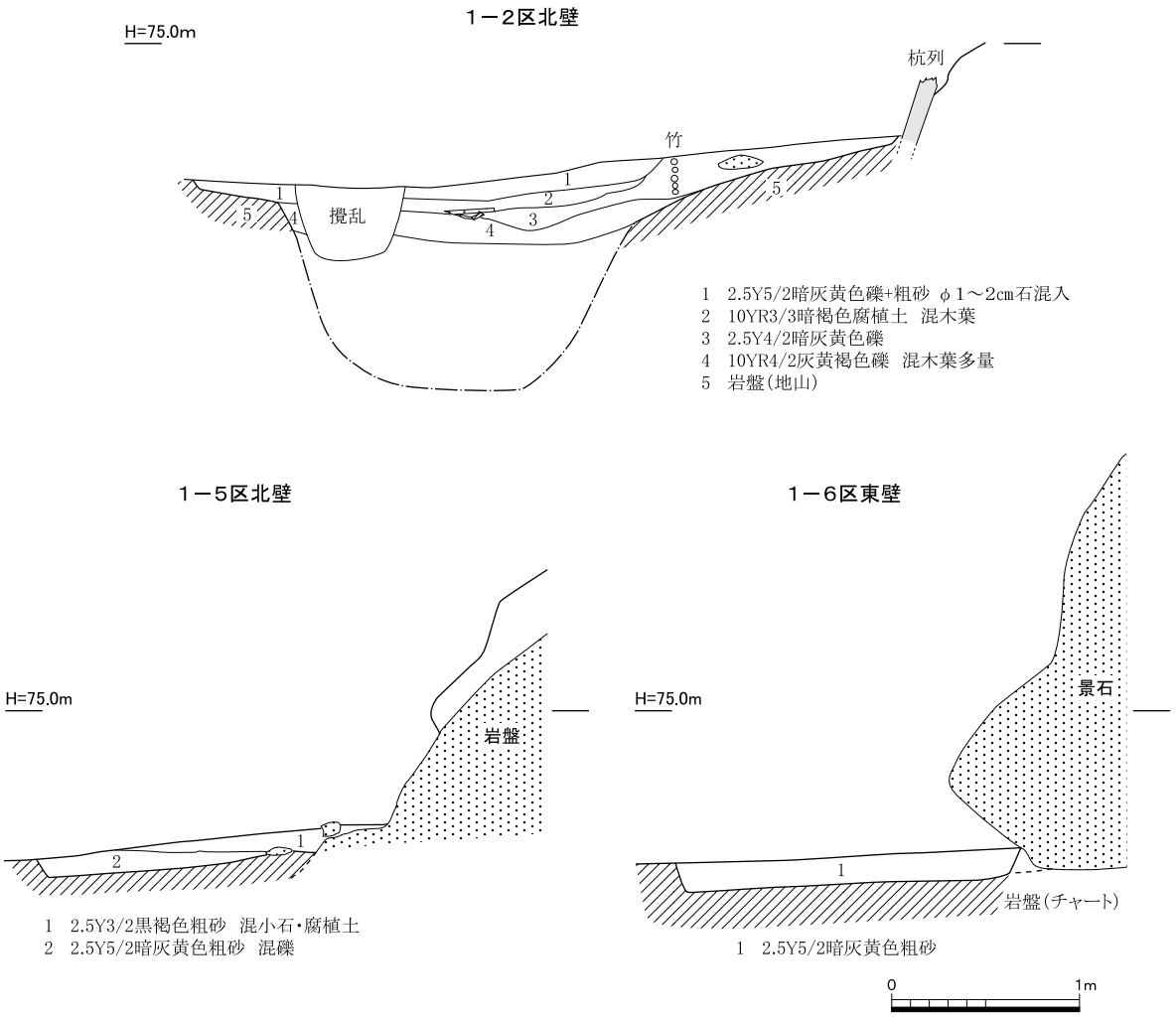


図16　1次調査区断面図（1：40）

東汀の滝組周辺から中央部の石橋付近にかけては、大きな景石を用いた護岸石組であることが判明した。調査前にも景石は一部露出していたが、斜面から流れてきた土で覆われ、また植栽がはびこり隠れていた。今回、植栽の枝打ちおよび草類や景石にかぶった土を取り除き石組の様子を観察できるようにした。滝組南側の石組護岸は安定しており、当初の状況を保っているが、滝組の一部と石組護岸の南半は不安定で崩落が起きかけている。石組の景石が動いた部分には10～20㎝ほどの石で補修されているが、水に洗われ元位置をとどめていない石が多く不安定である。

遺物

中央部の洲浜遺構から江戸時代前期から中期の遺物が出土している。土師器皿は厚手で見込み底部に沈線を施したもの、陶磁器類は椀や皿がみられるが、いずれも小破片である。焼締陶器には

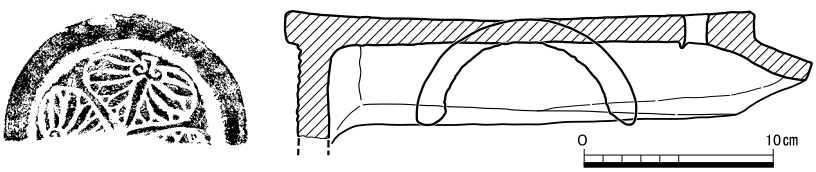


図17　1次調査洲浜出土軒丸瓦拓影・実測図（1：4）

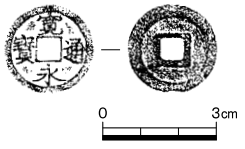


図18　1次調査洲浜出土銭貨拓影（1：2）

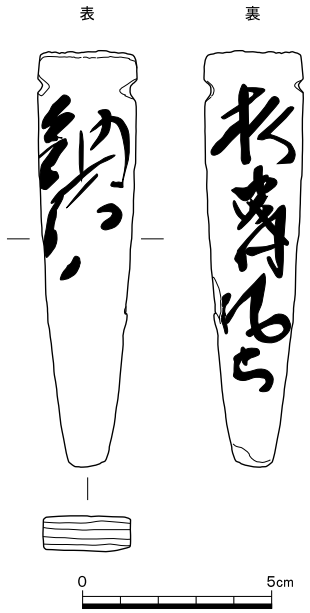


図19　1次調査洲浜出土木簡実測図（1：2）

信楽焼の甕や擂鉢がある。瓦類には三葉葵文軒丸瓦（図17）、鬼瓦、面戸瓦がみられる。銭貨として「寛永通寶」（図18）が1枚出土している。また、木製品として木簡が1点出土した（図19）。大きさは最大幅2.5㎝、長さ10.9㎝、厚さ0.8㎝を測る。頭部に両側から切り込みを入れ、下部は尖らしている。荷札木簡と思われる。両面に墨書が見られ、表面は「納御□□」、裏面は「杉森作右衛門」とみられる[1)]。

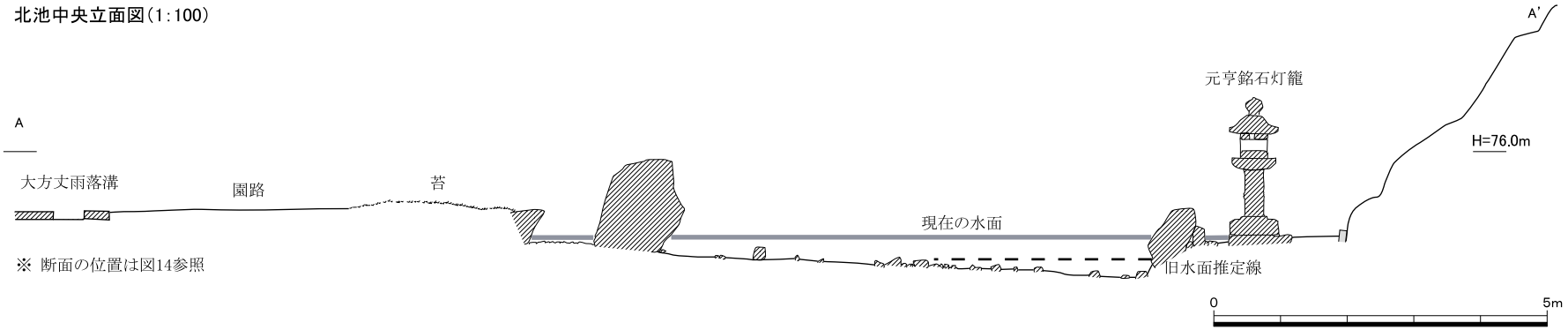
小結

北池の護岸については西側から青石橋にかけて石組護岸を用い、対岸の石灯籠付近はシガラミ護岸で景石をまばらに配している。また、滝組周辺から中央の石橋の間も石組護岸である。北池はチャートと花崗岩が大部分を占めている。石材は西側護岸に花崗岩が多く用いられ、滝組から南側の護岸はチャートを主体としていることがわかる。また西側護岸に用いられている花崗岩には、石を割るときの痕跡である矢跡が残っている石が多くみられ、形状も三角に加工したものが多い。矢跡も大型で石垣に使われる石のようである。石の据え方をみると西側護岸では花崗岩製の石を池に投げ込んだような状態のものが多く見られ、その上に石を積む工法である。現在の池の水位では花崗岩の大半が水没し顔を出していない。矢跡のある花崗岩は水面からは見ることができない。滝組周辺ではチャートを横に置いたり縦にして石組を行っており、石の据え方に違いがある。北池で露出しているチャートは風化が進んでいるが、勢至堂付近のチャートは硬く、景石に用いることが可能な石材である。石島や慈鎮石など巨大なチャートが用いられているが、知恩院境内から調達できたと思われる。境内は三段のひな壇造成が大規模に行われており、その折に掘り出された石が利用されたのではなかろうか。

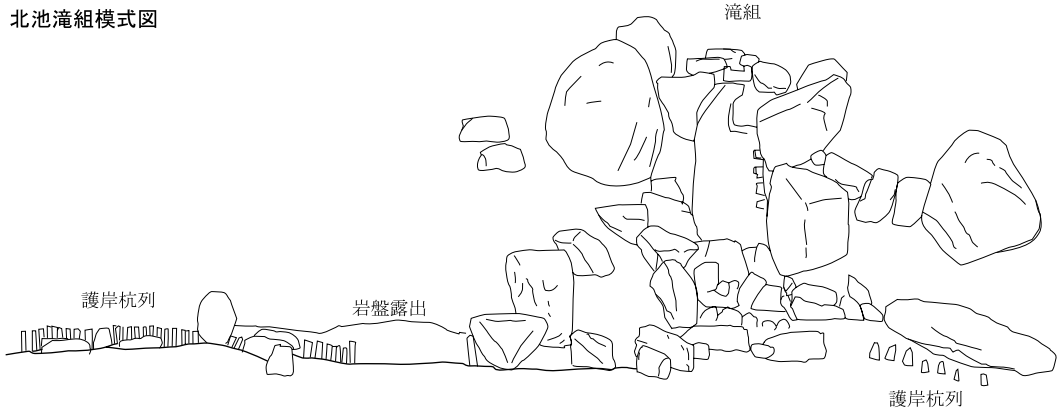
北池の中央部では洲浜状遺構を検出し、作庭当初の段階では大方丈側の汀はなだらかな勾配の洲浜を形成していたと思われる。方丈の建てられていた地面も現在より低かったことが予想される。しかし、対岸の山側は西に比べ傾斜のある汀となり、小さな景石を点々と配している。山側はチャートの岩盤が露出したり、粘土を張った直線的な汀である。その汀に人頭大の石を敷いて、景石を配し岬状に張り出した部分に石灯籠を据えている。石灯籠の竿の部分には銘が刻まれているが、風化が激しく判読しがたい状況である。今回拓本をとったところ鎌倉時代の元亨元年（1321）の年号が読み取れる。石灯籠は部品の接合や石材の産地の違いや不具合も見られるため、組み合わせが変更されている可能性がある[2)]。

石の用い方や積み方、汀の様子から、作庭当初は方丈側の汀に洲浜を用いた浅い池であったのが盛土した後、護岸を石組に変更し，水位を上昇させて深い池となったことが想定される。北池において池底の地形測量を行ったところ、中央部の洲浜状遺構の両側、青石橋周辺から北側と滝組の正面、石島の北側に底部の深い部分が認められる。二箇所とも底には腐植土が厚く堆積しているた

北池中央立面図(1:100)



北池滝組模式図



北池東護岸石組模式図

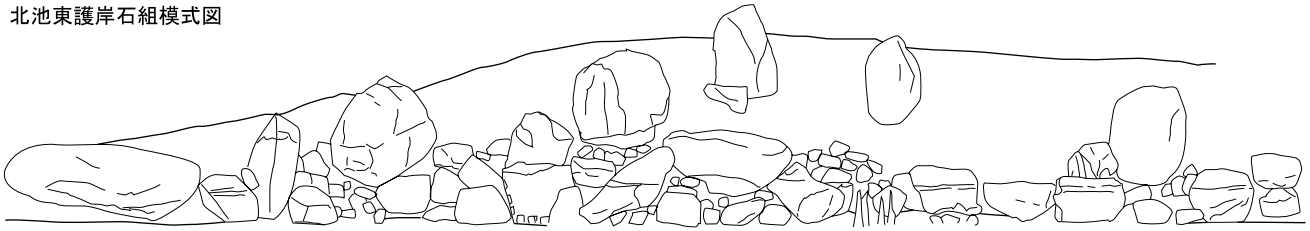


図20　1次調査北池立面図・模式図

め、さらに数十センチ深くなる。石灯籠の西側は溝状に深くなるため、両方の深い部分を溝でつないでいる可能性がある。当初は全体に浅い池であったが、この深い部分も石組護岸に変更したときに掘りなおし深くしたことが予想される。石組護岸として池を深くした時期については、寛永の大火災が方丈から出火したとされており、防火のために池を深くし貯水池の役目を持たせたのではなかろうか。現在の水位は標高74.80ｍを測るが、洲浜遺構の状況から当初の池の水位は74.40ｍ、今より0.40ｍ低かったと推定している。

滝組南側の石組では、かなり土がかぶっているため表面だけの観察であるが、石組の状況から見て登り口あるいは階段状の施設が埋まっているように見受けられる。また、対岸の石組の様子からも、この部分に橋が架けられていた可能性がある。

（２）２次調査

経過

この調査は、１次調査と同じく方丈庭園整備工事に伴う調査で、庭園の変遷、方丈建物と庭園の関係および築山下層の旧状を明らかにすることを目的として実施した。

調査期間は2006年12月11日～2007年１月22日である。

調査区は、建物と池の間にあたる陸部（２－１区）と北池の西汀付近（２－２区）の２箇所に設定した。

２－１区は築山の裾部から大方丈に向かって、南北0.5ｍ、東西3.5ｍの規模で設定した。基本層序は、0.05～0.1ｍの白砂・腐葉土・盛土、0.35～0.4ｍの黄褐色砂泥・泥砂・粘土の整地層、以下、灰色泥土の池状堆積層となる。２－１区拡張部分では、整地層直上に厚さ0.01～0.02ｍの極細砂層が確認できた。また、２－１区の延長として、大方丈の雨落ち溝の縁石近くを一部断ち割り、断面観察を行った。

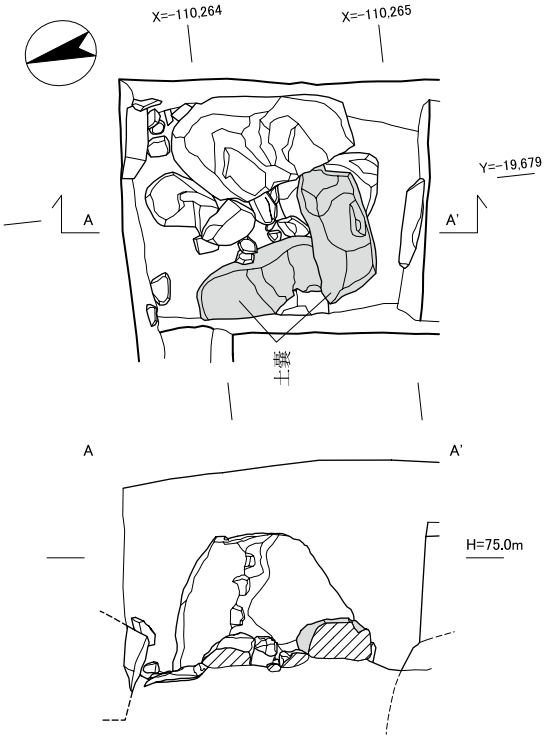
２－２区は西護岸から陸部に向けて、南北0.5ｍ、東西1.8ｍの規模で設定した。基本層序は、腐葉土、近代以降の褐色砂泥層、整地層・池状堆積層となる。

遺構

２－１区（図21・22、図版７） 白砂・盛土以下、整地層となる。整地層は厚さ0.35～0.4ｍで、粘土・小石を混ぜ合わせ、上から付き固めており、固く締まる版築状の構造である。整地層からは江戸時代前期の土師器皿片と瓦片が出土した。この整地層の一部を掘り下げた。その結果、整地層下に池状堆積を確認し、景石が部分的に露出した。そのため、景石を中心に東・南に調査区を拡張した。材質は花崗岩で、規模は幅1.0ｍ、厚さ0.5ｍ以上、高さ0.85ｍである。東面に切り出しの痕跡である矢跡が３個残存し、その大きさは約10～15㎝である。頭頂部は整地層より上面に突出している。底部付近で根固め用のものと、池底を造るためのものと思われる、10～50㎝大の石を、10数個検出した。

また、北・南壁付近で、景石の可能性のある花崗岩を２個検出した。南側の石は高さ0.5ｍ以上、幅0.6ｍ以上、北側は高さ0.3ｍ以上、幅0.4ｍ以上あることが確認できた。

２－１区



２－２区

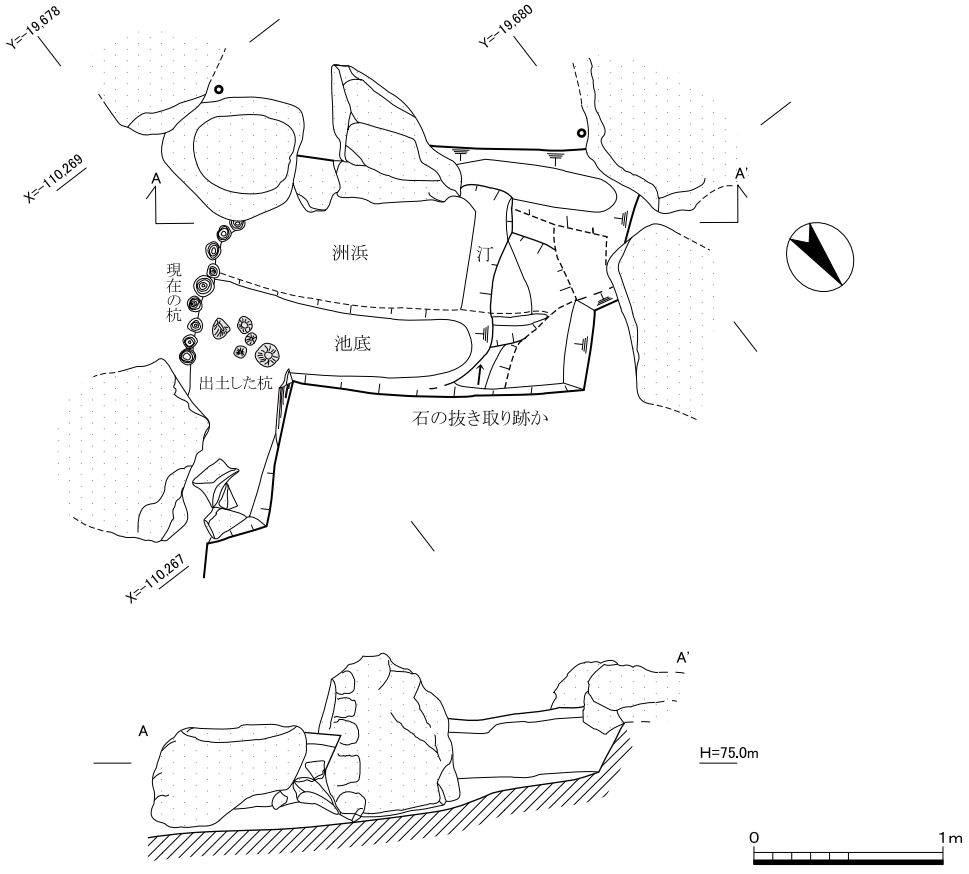
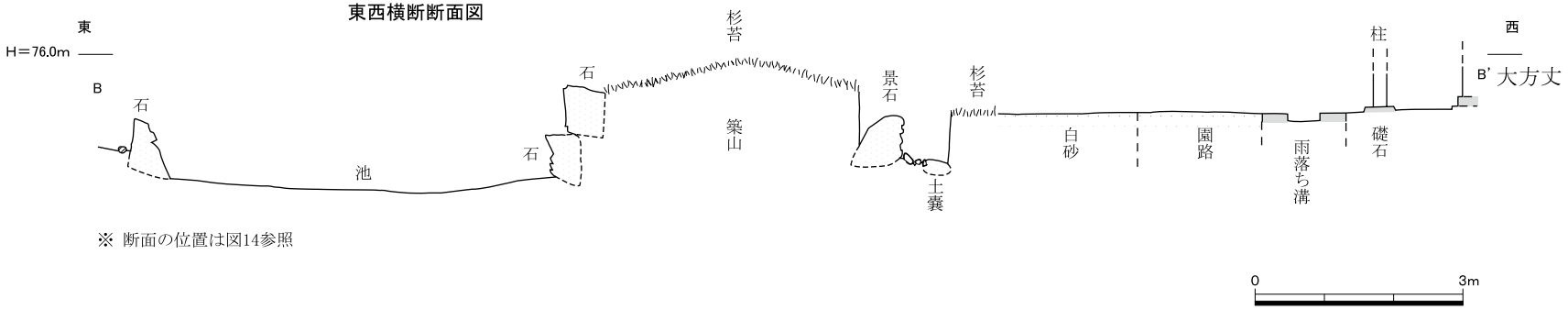


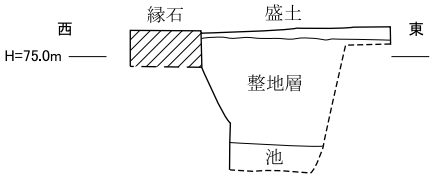
図21　２次調査区実測図（１：40）

東西横断断面図

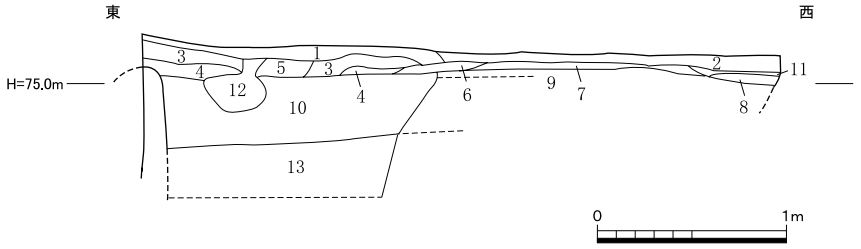


※ 断面の位置は図14参照

2－1区縁石付近



2－1区南壁



1　10YR3/3 暗褐色土(盛土)
2　白砂
3　10YR5/4 にぶい横褐色泥砂
4　2.5Y4/6 オリーブ褐色泥砂　砂多
5　3層+10YR6/8 明黄褐色粘土
6　10YR5/3 にぶい横褐色泥砂　やや粘質
7　10YR5/8 黄褐色砂泥　やや粘質　φ0.1cmの小礫混
8　10YR4/6 褐色泥土　粘質　φ1～3cmの礫混(整地層)
9　2.5Y5/6 黄褐色泥砂+2.5Y6/6明黄褐色粘土(整地層)
10　9層+2.5Y3/6 にぶい黄褐色粘土(整地層)
11　10YR5/8 黄褐色泥土粘質(整地層)
12　2.5Y4/6 オリーブ褐色泥砂(木の根による腐植土)
13　7.5Y5/1 灰色細砂+5Y5/1灰色粘土(池)

図22　2次調査区断面図（1：100、1：40）

これらの周囲で、俵形の粘土状の固まりと木の葉や枝を含む土の固まりを検出した。表面の一部を採取し分析した結果、イネワラが付着していることが判明したため、池を埋め立てるときに入れられた土嚢と判断した。池底から探査棒によりボウリングした結果、下層に池もしくは湿地状の堆積が続くことが判明した。

２－１区の延長の雨落ち溝縁石際の断面観察で、同様の整地層・池、その下層に池もしくは湿地状の堆積が続くことも確認した。

２－２区（図21） 近代以降に護岸補修のため入れられた明褐色粘土層は、厚さ約0.3ｍ、現岸から約1.3ｍ西まで続く。この層の下から護岸の杭６本、砂の洲浜、小礫・瓦を敷いた粘土層の池状堆積、池底を検出した。現岸から約1.3ｍ西の地点から緩やかに下がる面に、洲浜・粘土層が整地層を切った状態で検出された。石の抜き取り穴と思われる土坑と木の根によって汀の状況は大半が撹拌されていたが、汀付近まである程度整地した後、整地層を削平し傾斜面を造り、その上に粘土を貼り池底を造っている。その上にさらに粘土層に石や瓦片を混ぜた層を重ね、砂を敷き詰めている状況が観察できた。洲浜から江戸時代前期の土師器皿片が出土した。洲浜は昨年度調査で検出した延長と思われる。

２－２区南側と西側にある景石の据え方を確認するため、一部掘り下げた。それぞれの据え付け状況から、石１は整地後の層に、石２は整地層、石３は洲浜面、石４は現在の池の護岸として据えられていたと考えられる。

２－２区の延長上で、池内の一部を約0.4ｍ幅で断ち割り、断面観察を行った。灰オリーブ色・オリーブ灰色の粘質土層に0.5～3㎝大の石が混ざり、互層になっているのを確認した。この層は池底を形成するものか、造り替えによるものなのかは明確にできなかった。この底部で２－１区で確認したものと同様の、池もしくは湿地状の堆積が続くことが確認できた。

遺物

遺物は整理箱に２箱出土した。土師器皿、瓦が多数をしめる。土師器皿は小片が大半で、時期の特定できるものは数点である。

土師器皿は体部が厚く、底部内面に沈線を施した、江戸時代前期の特徴をもつものが整地層・洲浜から出土している。また若干それらより古い特徴をもつ土師器皿が、整地層の下層より検出した池内から出土している。土師器皿には灯明皿片が３点ある。

瓦は、洲浜の砂止めにしたような粘土に貼りつけた状態で出土している。また整地層内からも出土している。いずれも桟瓦であるが、表面を丁寧に仕上げている。特徴のあるものは、棟丸瓦の差し部が３点出土しており、いずれも整地層より上の層からの出土で、江戸時代後期から末期に比定できる。１片であるが、布目痕がある平安時代と思われる平瓦片が出土している。陶磁器類は、信楽焼の破片、菊皿、江戸時代末期の合子の蓋などが出土している。整地層からは鉄製の鎹が、ほぼ完全な形で出土している。

小結

１次調査で検出した洲浜の延長と考えられるものと、緩やかな汀を検出した。汀付近の洲浜から

は江戸時代前期の土師器が出土しており、陸部で検出した整地層から、ほぼ同時期の土師器が出土している。また汀付近の断面観察からみても、整地された時期とこの洲浜のある池が同時期であることがわかる。汀付近まである程度整地した後、整地層を削平し傾斜面を造り、その上に粘土を貼り池底を造っている。さらに粘土層に石や瓦片を混ぜた層を重ね、砂を敷き詰めている状況が観察できた。

出土した遺物からは、この整地層が創建当初の徳川家康の時期か、再建した家光の時期のものかの断定はできないが、家光の時期と仮定すれば、その下層から検出した景石のある池は、家康の時期であると考えられる。園路の西端で確認した整地層や池が建物に向かって続くことからも、整地層が家光再建の大方丈の整地である可能性が高い。

また、景石の表面に残る矢跡が、建物の方向（鑑賞者側）に向いていることに若干の疑問は残るが、この石は根石と思われる石が底面付近に散見されるため、景石として据え付けられていると判断した。

これらの池の下層にさらに池状の堆積があることが確認されているが、この層が池とすると、知恩院が家康により拡張される以前のものである可能性もある。

註

1） 木簡は、西山良平氏（京都大学）、吉野秋二氏（京都産業大学）、鈴木景二氏（富山大学）に解読していただいた。

2） 京都造形芸術大学の尼﨑博正教授にご教示いただいた。

5．まとめ

現在の園池は大方丈と小方丈の東側に細長く作庭され、北庭と南庭に分かれている。北庭には東側斜面に滝石組が設けられている。南庭は池に中島が築かれ、紀州の青石（三波川変成帯の緑色片岩）が組まれている。この庭園は寛政十一年（1799）刊の『都林泉名勝図会』に其一・其二にわたって掲載されているため、現状と比較することができる。名勝図会では景石などの細部までは不明であるが、現在の池の形状は当時から大きな変化はみられない。しかし、寛文五年（1665）～宝永七年（1710）の中井家所蔵の知恩院絵図では北池の西側護岸石組が表されておらず、青石橋も描かれていない。このことから中井家の絵図から名勝図会の間に庭園の改変があったことが読み取れる。

その他に、寛永十年の火災による建物の被害状況を記した知恩院所蔵の古図があり、その中には池の形状は大きく、北・南池に別けるくびれ部分が緩やかに描かれている。また、北池の北東には北に延びる区画線らしきものが描かれており、これが現在もある石垣を示していると思われる。３次調査においてこの石垣に沿って石組溝を検出した。

１次調査・２次調査では現在の石組護岸以前の洲浜状の汀を検出した。また２次調査・４次調査では園路部分で池状堆積および景石を確認しており、池の改修があったことが裏付けられた。この池の改修の時期が寛永十年の火災後の再建によるものであるのか、今回の調査では明確にはできなかった。なだらかな汀をもつ浅い池から護岸石による深い池に変えることによって、防火水槽の役割を池に与えたと考えられ、火災後の改変とも想定できる。

図23　『都林泉名勝図会』巻之二（国際日本文化研究センターより提供された画像に一部加筆）

江戸時代以前の知恩院については、応永元年（1394）～三十四年（1427）の「太子堂白毫寺古図」に描かれている。現在の境内地中段の方丈付近には、青蓮院の寺領で、鎌倉時代に金沢北条貞顕が築き、室町時代には足利尊氏が拠点とした常在光院が描かれている。常在光院は優美な庭園をもつ寺で、尊氏がその庭を愛でたという文献も残る。このようなことからその庭園が知恩院方丈庭園の前身とする説があり、常在光院の庭園が前身とすると、庭園の改変は徳川家康の大方丈、小方丈の建築に伴う可能性も考えられる。

常在光院の名は金沢文庫・徒然草・園太暦など多数の文献に見られるものの場所が特定される資料が少なく、遺跡としては認定されていないのが現状である。

今回、各調査において少しずつではあるが、庭園の変遷を考える資料を得たことを調査成果としたい。今後の名勝庭園内ならびに知恩院境内全体の調査に期待したい。

図　　版

1　北池（北から）

2　南池（北から）

１　３－Ａ区全景（北から）

２　３－Ｂ・Ｃ区全景（北から）

１　３次調査　立会箇所調査前風景（西から）

２　３次調査　石組（西から）

1　４－16地点（東から）

2　４－17地点（東から）

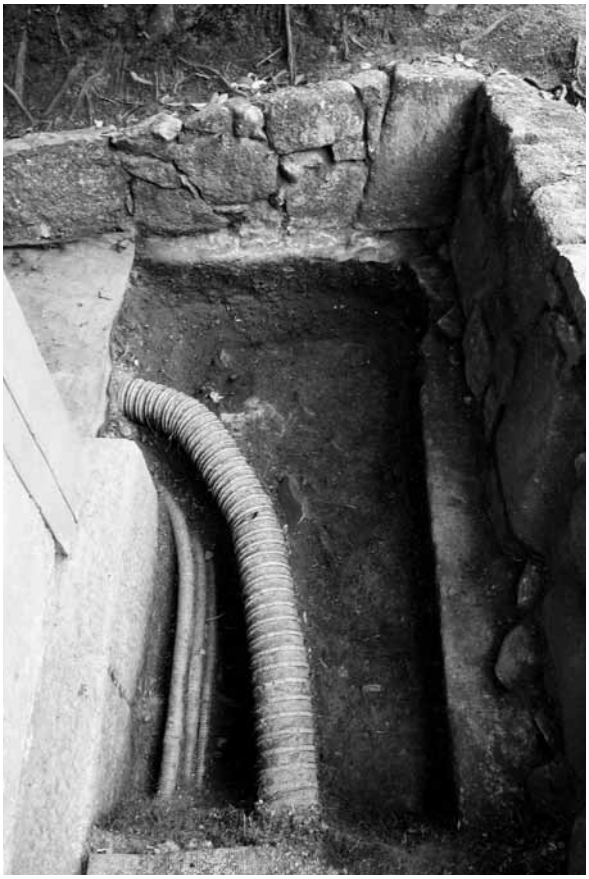
3　４－18地点（北から）

4　４－19地点（南西から）

１　５次調査前風景（北から）

２　５－Ａ区全景（南東から）

３　５－Ｂ区全景（西から）



４　５－Ｃ区全景（南から）

１　１次調査　１－１区洲浜（北西から）

２　１次調査　滝組（西から）

１　２次調査地全景（西から）

２　２次調査　２－１区景石（北西から）

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ちおんいんけいだい（きょうとししていめいしょう ちおんいんほうじょうていえん）
書　　名	知恩院境内（京都市指定名勝 知恩院方丈庭園）
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１２－１５
編 著 者 名	近藤章子・モンペティ恭代・柏田有香
編 集 機 関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発 行 年 月 日	西暦2013年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ちおんいんけいだい 知恩院境内 きょうとししていめいしょう 京都市指定名勝 ちおんいんほうじょうていえん 知恩院方丈庭園	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 しんばしどおりやまとおお 新橋通大和大 じひがしいるさんちょうめ 路東入三丁目 りんかちょう 林下町	26100	523 C516	35度 00分 10秒	135度 47分 14秒	2011年８月 1日～2012 年６月18日	発掘調査 約18.5㎡ 立会調査 延長113㎡	緊急防災 施設耐震 改修事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
知恩院境内 京都市指定名勝 知恩院方丈庭園	寺院跡 名勝	江戸時代	石組溝、 池状堆積層、 雨落ち溝	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、輪違瓦、塀瓦、鉄釘	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-15

知恩院境内（京都市指定名勝 知恩院方丈庭園）

発行日　2013年3月31日

編　集
発　行　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961